

(翻訳) ジョージ・ギッシング「気まぐれブログデン氏」

八幡雅彦

A Japanese Translation of George Gissing's "A Freak of Nature" •

Masahiko YAHATA

ホロウェイの納税者で彼ほど品行方正な人物はいなかった。彼の家は商店も無認可の酒屋もない通りに立っていた。柵と庭、そして「貸アパート」の目立たぬ看板がひとつあるだけの通りだった。商売人が注文を取りに来ることはあったが、石炭、野菜の行商人が客を得られることはまずなかった。

ブログデン氏は16年の結婚生活を振り返っていた。彼は当年40歳で、8人の子持ちだった。日曜日の朝、ブログデン夫妻が5人の子供を従えて教会に向かって行くのはこの通りの日常の光景のひとつだった。下の3人の子供は家で女中に預けられ、彼女が食事を作りながら面倒を見ていた。父親のシルクハット（形は古かったが、保存が良く行き届いていた）から一番下の女の子の可愛らしい靴まで、ホロウェイの一般家庭のまさに手本ともいべきしやれた格好を一家揃ってしていた。ブログデン夫人の装いはファッションブルとはいえなかったが、シミひとつなく、教会では中程の席に腰を下ろすのを常としている自尊心ある既婚婦人にはおあつらえ向きのいでたちだった。このような家族の集合体によってイギリス文化の屋台骨は形作られているのである。

月曜日の朝、天気の良い悪しにかかわらず、ブログデン氏は定刻に表玄関を出、窓が汚れていないこと、カーテンが整っていることを確かめるためチラリと家の正面を見やり、そしてホ

ロウェイ駅まで徒歩で行くのだった。そこから彼はシティーまで定期を持って通勤していた。9時半から5時半まで某有名商社のオフィスで働き、ある特定の時刻の列車で帰宅すると紅茶と夕食が彼を待ち受けていた。そして10時に床に入るのだった。

たまに太陽が顔を覗かせた時にはナッグズ・ヘッドの乗合馬車の2階に乗ってシティーまで行きたいと思うことがしばしばだったが、実際にはあり得なかった。それはブログデン氏にはその金銭的余裕がないという単純な理由からだった。彼の出費は、行く年も来る年も最後の一銭まで決められた額だった。予定外の2ペンスの出費は家計を混乱に陥れたであろう。文字通り、ブログデン氏はちょっとした気まぐれの楽しみのために半ペンス使う勇気さえなかった。この上なく厳しい節約の実行、確固たる日課の履行によってのみ年末に心の平穏が得られるのだった。実のところ彼には借金もなかった。そして昇給の見込み故に次の子供を生むことさえ可能だったし、すでに生まれた子供たちの増え続ける金銭的要求に応じることもできた。

ブログデン夫人は痩せて青白かったが、針金のように強く、夫よりいくつか年下だった。その強い義務感故に塞ぎ込むこともなければ痼癩を起すこともなかったが、かん高い、喧嘩腰の口調でのべつまくなしにお喋りをすることもなかった。とうに子供たちを可愛がる習慣は失

せており、夫に愛の言葉を投げかけるのは何年も前に止めていた。しかしそれは子供と夫が嫌になったという意味ではなく、生活故にそのような状況が生じたということに過ぎなかった。赤ちゃんを新たに生み育てるということは、家庭上の欠点探しよりも神の意志に従うことにより、厳格な義務感を持って果たされるべき仕事のひとつだった。

ブログデン氏もまた妻に対する愛、子供に対する愛を偽って見せることはなかった。もちろん、「愛する何々」という言葉は口から出た。冷淡に妻を呼ぶことはなかった。他の義務が許す範囲内で妻を精一杯助けてきた。しかし、妻がそばにいても優しい愛情を覚えることはどうの昔になくなっていった。実のところ、たびたび彼女の声は、彼女の表情は彼の神経にひどくさわっていた。最初の子と2番目の子までは愛情を感じた。しかし今では彼は自分の子供たちすべてをくたびれた愛情、嫌々ながらの責任感で見守っているだけだった。

肉体的に彼はさほど頑丈ではなく、ここ1、2年通常健康状態を脅かす精神的不調を覚えていた。恐らくは神経衰弱だった。多分胃に関係がある何かだった。食事療法を試みたが、目に見える成果は現れなかった。最近、朝目が覚めるとたいいてい軽い頭痛がし、そして時には手がぎこちなく震えることもあった。突然上の空に陥ることがあり、悩まされていた。訳もなく思考の流れが途切れたり、話しかけられても気づかないことがあった。また、疑いようもなく妻と子供たちは彼の堪忍袋の尾にさわった。時として怒鳴り声が喉まで出かかることがあった。毎週の家計の収支計算は、商売人の態度や商品の品質に対する夫人の文句も伴って、特にいらいらの種だった。

ある土曜日の夕方、夫人が雑貨屋の請求書のことを論じている時、彼は突然このうえなく奇妙な感覚に襲われた。頭がクラクラするのを覚え、体までが同じように回り始め、それを避けるためテーブルに掴みかかった。それから震えが手足を襲い、歯がガタガタ鳴り始めた。

「やめてくれ！お願いだからやめてくれ！」

半分は怒りで、半分は恐怖で、妻に向かって叫んだ。

「一体どうしたっていうの」

「気分が悪いんだ。耐えられないんだ。これらの請求書で頭がどうにかなりそうだ」

夫人は恐怖というよりも怒りを覚えた。

「じゃあ、あなたが雑貨屋に砂糖を3ペンスに負けさせれば良かったのよ……」

彼は飛び上がって、部屋の中を歩き回った。

「ちょっと気分転換に外に出かけてくる。頭に血が上がったみたいだ。どうか俺に話しかけないでくれ。どうかお願いだから！」

そう言うなり廊下に飛び出し、帽子を掴み、出かけた。セブン・シスターズ・ロードをしばらく歩くと不思議な発作は消えた。再び帰宅した時、夫人はすでに寝ていた。いつも通り、彼は夫人のそばに静かに横たわった。

しかし眠るためではなかった。彼の心は奇妙な回想に捕らわれた。少年時代と独身時代が鮮明に蘇ってきた。幾分穏やかな性質で、人生の成功の野望に燃えているひとりの若者の姿を自分の内に見た。品行方正な毎日の繰り返しのうちですっかり忘れていた昔のちょっとした過ちを思い出していた。リジーというあの娘……ああ！それから、彼とふざけ好きの友人が暗い郊外の道で帽子の高さのところに綱を張ったあの夜のこと。そして金持ちになると心に決めたこと。いつの日にか自分専用の馬車が持てると信じたこと。市の名士になるのを夢見たこと。

夫人は深い寝息を立てていた。赤ちゃんが少しの間泣いたが、再び寝入った。

朝、彼は教会に行くにはあまりにも気分がすぐれなかった。一日中彼は、思考が、品行方正な男性にしては考えられないような方向に、しかも日曜日だというのに、傾いて行くのを必死で抑えようとしたが、無駄だった。カレドニアン・ロードを隅から隅まで長い散歩をしたが、気分はいっこうに良くなりならず、良くなる気配もなかった。夕方、夫人が子供たちをベッドに寝かしつけている時、彼は再び突然衝動的に立ち上がり、家から出かけるというよりは、こっそり忍び出た。妻に何の説明もなしに日曜日外出

するという事は今までに聞いたことがなかった。奇妙なことに、彼は大胆不敵な気持ちになり、かえって元気が出た。

今度は彼はキャムデン・ロードの方角に向かって行き、30分歩いた後、さほど怪しげではない、短い、街灯の暗い裏通りに入った。ここでピカピカに磨かれた呼び鈴が彼の目に入り、それと同時に途方もない誘惑が頭をもたげて来た。通りを見渡したが、人影はなかった。即座に彼は、まるで抑えがたい動機に突き動かされたかのように、呼び鈴の取っ手を力一杯引いた。それから大股で歩き去り、近くの角に姿を暗ました。

彼の体は熱く火照っていた。この突拍子もないはずがとにかく彼には良かった。頭のつかえが取り除けたようだった。声をひそめて、思わず笑ってしまい、スキップをしたい気分だった。

別のひと気がない通りで、彼は再びいたずら心に捕らわれた。今度鳴らしたのは診療所のベルだった。そしてドアはすぐに開けられると思ったので、彼は喜びいさんで飛んで逃げた。ちょうど角を曲がったところで危うく警官の両腕に飛び込みそうになり、即座に思わず叫んだ。「トテナムコート・ロードで大火事があっているのを御存じですか」

「いえ、存じませんが。どなたの家ですか」

「分かりません。遠くから見ただけなんです。わたしは急いでいるんです」

あれこれ騒ぎを起こし、彼の気持ちはやっと収まった。そして早足でホロウェイに戻った。鍵を開けて家の中に入ると、目の前の廊下に夫人が立っており、怒りに満ちた怪訝な表情をしていた。

「散歩をして来て、気分が良くなったよ」

そう彼がはっきり言うと、当然の帰結となった。夫人は延々1時間に亙って抗議した。彼女にとっては普通でないことはけしからぬことだった。彼女は夫にありとあらゆる言い方で、あなたが理解できないと諫めた。プログデンは馬耳東風だった。思い出しただけでもおかしくて、笑いを抑えるのに一苦労した。

しかし翌日、頭痛と手の震えはかつてなくひどかった。仕事から帰って来た時、今までになく具合が悪く、妻もやっと彼の体調の悪さに気づいた。

「1日、2日休めば良くなるさ。休養と気分転換をすればな。実は俺は気分転換しないと休養にならないんだ。会社の休みを取って、兄の家に行きたいと思ってんだが。」

プログデン氏の兄はウィルトシャーの小さな町に住んでおり、織物業で繁栄していた。数年前に会ったきりだった。2、3日長い議論を戦わせた末、プログデン氏は真剣に気が狂う一歩手前だということが分かり、会社の休暇さえ取ればそうしても良いという許可を妻から得た。以前に彼は会社から理由にならない休暇を取ったことはなかった。会社は彼に1週間の休暇を快く与えた。そして朝早い列車でパディントン発った。

広々とした郊外の景色を最初に目にした時、彼の心は実に和んだ。ロンドンが切れる場所を見ろということは、今までに彼を押し潰しそうだった重荷を振り払うことに等しかった。彼は心密かにウィルトシャーで医者にかかることに決めていた。もちろん診察費のことが心配だった。なんとか節約で埋め合わせねばならなかった。しかし、何人かの知人たちのように完全に倒れてしまうよりはましだった。間違いなく何か神経の病気だと感じた。実際、前の日曜日のことを思い出してみても、気が狂う一歩手前の危険な状態ではなかったか。あんな恥ずかしい行いはどんな医者にも告白できそうになかった。

今や、彼は旅を進めるにしたがって目的の場所にまっすぐ行く気が遠のいてきた。大気と移動が彼に、兄の家では経験できそうにない自由、完全独立への渴望を吹き込んだ。夜どこかひとり、例えば田舎の旅籠で過ごすことができたならどんなに楽しいだろう！そうしようではないか！今夜一晩だけ。そして明日こそ予定通りの場所へ行き、妻に約束の手紙を出せばいい。

ほとんど労せずして、彼は目的地の町まであと約20マイルという見知らぬ場所ですら列車を下

りた。荷物を馱に預け、田舎道を歩いた。結婚によって青春が終わりを告げて以来初めての経験だったので震えを伴いながらも、自由を謳歌した。2、3時間の間、場所にはまったくおかないで、周囲の景色にもほとんど目を暮れずに、狂喜するばかりの自由に身を浸し、あてどなく歩いた。「ああ、なんて体にいいんだ！これこそ俺が必要としていたものだ。結局、医者代を払わずに済んだ。もう俺は新しい男に生まれ変わったんだ」

ついには食欲が彼を快適な田舎の旅籠へと向かわせた。部屋に入るとふたりの客が食事を取っていた。ひとは頬が紅潮した、人懐っこい笑みを浮かべた中年の牧師で、もうひとは着こなしのいい16歳程度の少年だった。ふたりは彼をちらりと見やり、プログデン氏は帽子を脱いでおじぎをした。彼は普段のシティー行き格好をしていたので、どこから見ても折目正しいサラリーマンとしか思えなかった。その服装には貧乏を匂わせるものはなかった。懐中時計の金の鎖さえ覗かせていた。プログデン氏の顔立ちに関してはロンドン市長の推薦状にも値すべきものだった。正直一筋で、生真面目さが刻まれており、賞賛すべき聡明さを表していた。

目の前に置かれた家庭料理を賞味している間、必然的に仲間の客の会話が耳に入ってきた。伯父と甥の間柄に思えた。そして彼らもまたプログデン氏同様ただ田舎を長く散歩しているようであった。聖職者の話振りは非常に感じが良く、陽気で快活な性格と好かれる飾り気のない心を表していた。ジョークを頻繁に言っていた。それは最高にうまいとまでは言えなかったが、価値あるものだった。

暖炉の上にはどこかのウィスキー会社の宣伝広告である色彩画が掛けられてあった。一本の巨大なカリフォルニア松が描かれており、生き物のような幹を突っ切ってバス道路が貫通していた。少年は伯父にこの自然の驚異について質問を始めた。当時、たまたまプログデン氏はカリフォルニアを旅した経験のあるシティー勤務の事務職員を知っており、この善良なる牧師が提供できるよりもはるかに多くの知識を得てい

た。彼は会話に加わることを望んだ。1ポイントの上等なビールが彼を上機嫌にしていた。彼は、仲間に入りたいという気分以上に、自分がひとかどの重要人物である風に見せたいという欲求にかられた。それは人生がめったに許さなかった喜びだった。微笑みながら絵を眺めていると、牧師が気づき丁寧に話しかけてきた。

「恐らく貴方様はこれらの高貴な木についてわたしより多くのことをご存じですね」

プログデンは喜んで覚えていることすべてを語り、連れのみは親しげに耳を傾けた。「この地をご旅行されたことがおありなのですか」

「ええ、あります。数年前になります」

こうやって口を聞いているのが果たして本当に自分なのだろうか。ホロウェイのプログデンなのだろうか。それとも悪魔に口をつかまれたのだろうか。彼は椅子にもたれ、震え、恥ずかしさで圧倒されていた。

「実に興味深いですね」田舎の牧師は甥をチラリと見やって言った。「貴方様が羨ましい限りです」

「そこへは仕事で参りました」プログデンは未だ彼自身のものとは思われぬ声で言った。そしてシティーの知人に当てはまる個々の事例を付け加えて述べた。

牧師は話し好きだった。15分の間は彼と甥とプログデン氏は仲良し3人組になった。会話は仕事のことに及んだ。というのはプログデンは休暇を取っているロンドンの商社マンということになったからで、このことは明らかに温和な聖職者の興味を引いた。

「ところでお教えいただきたいのですが」と牧師。「ひとりの聡明な若者がロンドンの商社で雇っていただけるチャンスはどれほどのものでございましょうか。実は、このわたしの甥がそのような就職口を探しております」

「例えば、トラスコット・ウィンダム商事のような会社に」プログデンはほほ笑みながら彼自身の有名な雇い主の名前を挙げて言った。

「左様です」牧師は満足気だった。「まさにその通りです。しかしその類いの大手商社では

取り立てて能力のない若者を雇うことは不可能だと思うのですが」

プログデンは血が騒ぐのを感じた。いつかの夜、ドアの呼び鈴を鳴らした時彼を突き動かしたのと同じ衝動だった。神経がゾクゾクする、向こう見ずで大胆不敵な感覚だった。

「ひとつ伺いたいのですが」彼は幾分おごそかに言った。「こちらのお若い紳士の方は今までに商社に勤めるための御勉強をされた経験がとおありでしょうか」

少年は明るく面接試験に臨んだ。プログデン氏は頭の中がグルグル回った。ついには牧師の方に顔を向け、静かな口調で言った。

「恐らくお話しした方が良いと思うのですが、私がトラスコットでして、今話の中に出てきております商社の現在の経営陣のトップの者でございます」

目の前が霧がかすんだ。耳の中が血で沸き返った。嘘の上に嘘が積み重なり歯止めが効かなくなった。彼は異常なまでの虚栄心に飢えていた。彼は、人生このかたちっぽけな役割しか果たして来なかったこの世の中の頂点の極みに自分を置いていた。途方もない言動に彼の想像力は、その異常性にさえ気づかないほど、すっかり眩んでいた。

「トラスコット様」牧師は言った。「お知り合いになれて嬉しゅうございます。どうぞわたくしめの自己紹介をさせていただきたく思います。私の名はラムと申しまして、ディピンガムの牧師をいたしております」

もし、厳密には間違いとは言えなくて、すっかり別の人間になりきった人物がいるとすれば、この時のプログデン氏がまさにそうであった。ひとつに彼は常にトラスコット氏を賞賛し尊敬し、そして人生の模範として仰いできた。この偉大な商社経営者はシティーの有力者であったばかりでなく、その人間性は尊敬を集め、仕事の部下たちの間では殊に寛大という評判だった。身体的にはどう見てもプログデン氏は彼とは似ても似つかわなかったなかつが、そのことはまったく気かけなかった。このべてんはただ彼には実の無い利益のためだった。生まれ

てこのかた初めて彼は人から尊敬される身分となっていた。しかも相手は英国国教会牧師だった。彼がもし信心深い人間だったとしたら、当然、この欺瞞の罪は神聖冒瀆の罪によってさらに重いものになると感じたことだろう。しかし彼の今の心理状態ではそのような反省心がつけいる余地はなかった。彼はまるで宙を歩いているようだった。そして頭の中は風船のように膨らんでいた。

「私は健康のために是非必要だと思っているのですが」と彼。「時折田舎にやって来て、一日中歩くことにしているのです。それが、私を悩ますちょっとした病気を治すには一番手っ取り早くて良い方法です。私が歩いて参りましたのは……」彼は駅の名前を挙げた。「それで私はこれから駅まで歩いて戻りまして、夕刻の列車でロンドンに戻る予定にしております」

ラム氏は敢えて提案した。

「もしよろしければ別の方向に行かれませんか。ディピンガムまでわれわれと一緒に散歩になりませんか。すばらしい散歩ですよ。そこからスウィンドン行き普通列車が何本かございます」

「ああ、それはこのうえなく喜んで！」

かくして3人は旅籠を出た。ディピンガムまでは約7マイルの道のりだった。このすばらしい夏の日午後、2時半から6時半までゆっくり時間をかけて歩いた。牧師は、気を使って、甥の野望のことには触れなかったが、プログデンは少年にこの重要事項は常に彼の頭にあることを示唆する言葉を繰り返した。3人が小さな町に近づいた時、ラム氏はプログデンに牧師館まで来て欲しいと要請した。スウィンドン行きの最終の上り列車には十分間に合うということだった。有頂天の幻想以外何も頭に入らず、プログデンは明るく同意し、牧師館へと彼らは歩を向けた。

彼らは、家庭的な貴婦人であるラム夫人と、彼女の妹で夫をなくした少年の母親に迎えられた。夕食が用意され、プログデンは家族と一緒に食卓についた。彼には、その架空の地位にそぐわない習慣を露にしまう危険性は感じら

れなかった。話振りのみならずマナーにおいても非の打ちどころない上品さが現れていた。婦人たちの娯楽と教養のために彼は今一度カリフォルニアの体験を語るよう説き勧められた。プログデンは善意を込めて教区の貧民に関する質問をした。そしてそれから彼は、このうえなく場違いなことに、その給与は惨めとは言わないまでも、一般家庭の需要を満たすのがやっとという給与しか支払われていない、ロンドンの中でも非常に功績の大きい階級、すなわち折り目正しい事務職員たちが辛抱強く耐えている苦難に関して語り始めた。

「私はそのような状況は手の施しようがないと思っております。雇用者によって支払われる給与は厳しい経済上の法則によって規定されております。しかし私は悲惨な例も見参りました。幸いなことに、いくつかは時々人の目に止まり、そうすればもちろん何らかの救済措置は取られていますか」

ラム氏は牧師に関する話をする事になり、かくして会話は延々と続き、ついには居間の暖炉の上の時計が8時を打った。プログデン氏はあたりを見回した。そして言った。「列車に乗らなければならないことをすっかり忘れていました」牧師はこの時を待ち構えていた。

「トラスコット様、貴方様は今夜どうしてもお帰りになる必要がございましょうか。もし泊まっていただけると大変嬉しいのですが。もし部屋を提供させていただけるようでしたら……」

プログデンは不快な症状を感じ始めた。半分苦痛を伴った無気力感が襲って来た。意を決することができなかった。次の日のことが恐ろしい形で心の中に閃いてきた。しかし彼がこのように心を決めかねて立っていると、牧師は彼が泊まるのは当然と見なすのだった。実のところ、ロンドンへ帰るのはもはや不可能で、ラム氏はそのことを百も承知だった。彼は、甥の将来のためには無理もない情熱で、トラスコット氏との友情を固めるために全力を注いでいた。それは飾り気のない有徳の人間には不慣れな策略で、痛ましくさえあった。

ふたりは書斎に腰を下ろしてタバコを吸った。プログデンは寡黙だった。彼は10時には「イエス」、「ノー」の言葉さえ発するのが難しい状態だった。妻と子供たちのことを思った。現実の身の回りのことが目の前に広がって来た。筋肉痛を覚え、頭の中がグラグラし、恐ろしく心の重荷がのしかかって来た。突然、彼は椅子から立ち上がるというよりもよろめいた。

「ラム様、どうやら私は今日歩き過ぎたようです。疲れがひどいようです……」

牧師はこの上なく同情した。数分後、彼はこの偉人を客のくつろぎのためにはすべてが整えられた寝室に案内した。

「朝になりましたら」プログデンは牧師と握手を交わしながら上の空で言った。「もう一度われわれの若い友人の方についてお話したいのですが」

「ああ、それはどうもありがとうございます」牧師は親愛の情を込めて答えた。「どうぞ気持ち良くお休みなさってください」

ドアが閉じられた。プログデンは部屋の真ん中に立ち周囲を見回した。飲み過ぎて、浮かれ気分から落ち込みへと移行しつつある人間の表情だった。

絵を眺め渡した。そしてベッドに向かい、陰鬱な目付きでそれを見た。抜き足差し足で窓とドアの間までゆっくり歩いて行った。すぐに両足が震え、勇気がくじけた。椅子に崩れ落ち、両手を両膝の上に落とし、惨めさに打ちのめされた人間のようにへたり込んだ。時が過ぎた。すぐ近くの教会の時計が15分おきに打つのが聞こえた。家の中は物音ひとつしなくなっていた。完全に静まり返った夜だった。木の葉の音ひとつしなかった。

時計が深夜12時を打った。同時にプログデン氏は立ち上がり、しばらくその音に耳を澄まし、窓までこの上ない忍び足で進み、細心の注意を払ってブラインドを上げた。外は真っ暗だった。上も下も光りひとつ見えなかった。彼は窓の掛け金を外した。彼は震える手で、音を立てずに下の窓枠を上げることができるかどうか試そうとした。そうだ、うまくいかもしな

い。これは昔の造りのしっかりした家で、ロンドンの自分の家で慣れっこになっている間に合わせの家庭用品などはない。

窓は半分開いた。しかしその時恐怖が彼をとらえた。ラム氏は犬を飼ってはいないだろうか。彼はこの部屋が家の表からあるいは裏から見えるのかどうか分からなかった。しかし彼は庭があるのに気づいた。何か大きな声を上げる動物が牧師館を見張っているかもしれない。

危険は敢えて犯さねばならぬ。しかし待てよ。自分は一体何をやっているのか。明かりを消していなかったではないか。誰かが常に自分を見張っているかもしれない。

額から冷や汗がしたたり落ちながら、彼は十分自分の体が通り抜けるだけ窓を上げた。このような状況では大した高さではない。庭までせいぜい12フィートだろう。立派なシルクハットを手にしっかり握り締め、神経を集中させ、ともかくにも窓の外側にもがき出た。そして窓の下の木の部分を必死でつかみ、足を下におろした。

30秒余りつかまっまっていて、飛び降りた。ドサッと重い落ち方だった。しかし思った通り、花壇の土で音は鈍った。危険な音を立てたと彼は思った。帽子は吹き飛んでいた。衝撃から立ち上がった時、彼はこの必要不可欠な頭かぶりを虚ろに探した。ああ、何ということだ、踏みつけてしまった。彼が体の向きを変えた時、足の下で潰れたのだ。

今や見るも無残な穴開き帽子を頭に押し込み、彼は発見された強盗よろしく一目散に駆け出した。道も出口もどこにあるのか見当がつかなかった。日の前に低い壁があった。彼はそれを乗り越えた。そしてドブの泥の中深くに落ちた。しかしすぐに抜け出し、広い原っぱを猛スピードで駆けた。出口を見つけ出すのに30分はかかったに違いない。どこもかしこも行き止まりの生け垣のようだった。おまけに雨が降り出した。しかし彼は汗まみれだったために、降り方が激しくなるまで雨に気づかなかった。やっと出口が見つかり、大通りへ出た。

空から夜明けの明かりが差すまで、彼は全速

力で歩き続けた。広大な野原が続いたが、時折、集落、村落を抜けた。時計は止まっていたが、夜明けまでに少なくとも10マイルは歩いたに違いなかった。もう2、3時間もしたらきっと警察が包囲網を張り巡らして彼を捜索するだろうに、こんなことして一体何の役に立つのだろうか。ラム氏は必然的に自分のことを最低の人物と見なすだろう。すぐさま本物のトラスコット氏と連絡を取るだろう。彼のいで立ちの詳細な描写、そして彼が町にいないことが相俟って、彼のロンドンの知人たちは真実の推測をたくましくせざるを得ないだろう。自分は人生も家族もメチャクチャにしてしまった。いっそ自殺して、心神喪失症の犠牲になったと思わせた方がましかもしれない。

そうだ、川か湖に身を投げよう。そして彼はただちに適当な場所を探し始めた。

見つけるのは決して困難ではなかったが、決意を実行に移す努力が困難そのものと分かった。2、3時間の間、彼は座るかあるいは彼の悲しみに終止符を打つことを約束してくれる泥川の近くを歩くかしていた。1分、1分と時間が経つにつれ、そのような行いの可能性は薄れていった。空腹で今にも倒れそうだった。ポケットには金があった。そして旅籠も何軒かあった。朝も時間が経ち、彼は1軒の道路沿いの旅籠に入り、まるで少年時代から何も口にしていないかのように食べまくった。

四苦八苦して彼は帽子の形を見苦しくも整えた。ブラシ、水、その他の化粧用品が彼の愚行を引き止めた。しかしこんなことして一体何の役に立つのかと彼は自問した。確かに彼は実際逮捕を恐れる理由などなかった。興奮がディペンガムからの逃避行の危険を増大させただけだ。しかし自分の人生はもう台なしだ。臆病で自殺できなかつたがために、人生これから先苦しまなければならない。もはや兄の所へ行く気は失せた。いなくなってしまうたい、消えてしまいたい。誰にもバレない土地で、ニセの名前を語って肉体労働をしてパンを稼ぎたい。慈善団体が妻と子供たちを食わせてくれるに違いない。

彼はそれまで自分のいる場所がまったく分からない状態だったが、あてもどなく歩いているうちにいつしかスウィンドンまで2、3マイル以内のところまで戻って来ているのに気づいた。何の計画を立てることもできず、彼は進み、列車の駅まで歩いた。彼の心は未だにまぼろしを見ていた。現実を把握できず、スウィンドンでブリストル行きの切符を買い、そこに着いて日が落ちてから怪しげな下宿を借り、新生活を始めるんだと自分に言い聞かせた。

それから3日後、多忙な商売人トラスコット氏は彼を当惑させる手紙を受け取った。差出人は、彼の数多い事務職員のうちのひとりで、ちょうど病気で休暇を取って休んでいるプログデン氏で、イースト・エンドのどこかから出されていた。「誠に恐縮なお願いでございますが、小生、社長様との個人的会見を所望いたします。小生、深刻な精神病にかかっております、小生の体面を汚した行いに関しましては小生の非にあらざと信ずる次第であります。小生の弁明をお聞き下さることを切にお願い申し上げます。小生、社長様が御指定下さる日時、場所に参らせていただきます」ところでトラスコット氏は、彼の職員のいかなる不名誉な行いも耳にはしていなかった。しかし会社で尋ねたところ、彼はプログデン氏は最近どうもいつもの彼らしくなかったことを悟った。それ故、彼は電報で返事を打ち、プログデン氏にその日の晩彼の家にやって来るよう依頼した。

それに伴っておこなわれた会見はすばらしいものだった。最初彼の事務職員を一目見て、そしてこの哀れな男が発した最初の言葉を聞いて、トラスコット氏は紛れも無く精神異常者を相手にしていると信じた。しかし15分かそこら話してみて、物事はまったく違った風に見え

てきた。知性と同情の心を備えたトラスコット氏は、このすべての驚くべき話に注意深く耳を傾け、それからプログデン氏の私生活に関して2、3の重要な質問をした。

「正直に私に話して欲しいのだが」彼は最後に尋ねた。「君自身はこの奇妙な行いの理由をどう説明するかね」

プログデンは明晰に考え、話すことができた。彼は非常に見苦しく惨めな様子で、紛れも無く病気だった。しかし彼は明らかに正直だった。

「社長様」彼は卑屈な口調で言った。「私はどうやら働き過ぎだったに違いありません」

「わたしも同感だ。ところで君、現在の精神状態はどうだね」

「ずいぶんいい状態です」プログデンの答えは正直だった。「すこぶる良くなりました」トラスコット氏は、多分プログデンには分からなかったことだが、自然が復讐したのだと、そしてやっと正常に戻るのを許したのだと推測した。彼は親切に、思慮深く話した。プログデンは費用は会社持ちで1か月の休暇を与えられた。結果が見えてから再度話し合うということになった。月の終わりにプログデン氏は会社の元の地位に戻ったが、僅かに昇給があった。彼は昔どおり信頼のおける立派な社員だった。

トラスコット氏とディピンガムの牧師の間で、双方とも十分満足できる親しい手紙のやりとりがあった。最初に手紙を出したのはラム氏ではなかった。そしてその奇妙な話は牧師館の壁を越えて知られることは決してなかった。

(使用テキスト: "A Freak of Nature", George Gissing, *The Day of Silence and Other Stories*, ed. by Pierre Coustillas, London: Everyman, 1993, pp.113-125)